8　桶巻き作り三重弧紋（ⅡKB―１）軒平瓦の特徴

山王廃寺出土の重弧紋軒平瓦のなかでⅡKB―１は、その出土量が（1974～99年までの出土点数の集計）全体の半分（『平成19年度調査報告書』66頁の出土軒平瓦集計表でⅡKB＋ⅡKC は出土総点数228点中の157点〔54.6％〕を占め、軒丸瓦Ⅳ式（同資料65頁でⅣA＋ⅣB＋ⅣC＋Ⅳは出土総点数340点中の134点〔39.4％〕）と組合せ関係にある。

また、この軒瓦の組合せは安中市下秋間の八重巻窯において生産されている(註27)。

軒丸瓦Ⅳ式（複弁七弁蓮華紋）は、松田猛氏が言うように７世紀第４四半期(註28) に初現を考えるとしても山王廃寺では、この軒瓦に続いて出現するのは、軒丸瓦XⅣ式（上野国分寺軒丸瓦Ｂ201a）や文字瓦で「薗田」・「山田」などの笠懸窯産で上野国分寺の創建のために生産された一群である。従って、軒丸瓦Ⅳ式と軒平瓦ⅡKB―１の軒瓦は、出土量からは山王廃寺の伽藍形成期の瓦と考えなければならないし、その用いられた時期については８世紀の前半までと考えるべきものと思う。桶巻き作り三重弧紋（ⅡKB―１）軒平瓦は質量ともに山王廃寺を代表する軒平瓦であるが、わが国で創案された重弧紋軒平瓦から、かなり変化した重弧紋軒平瓦とは言え、大きさや形のうえではどっしりとした存在感ある軒瓦である。

重弧紋軒平瓦は、大和地方において創案され重圏紋縁重弁八弁蓮華紋軒丸瓦（山田寺式・系）・面違鋸歯紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦（川原寺式・系）・雷紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦（紀寺式・系）などとともに７世紀後半の時期、日本各地の寺院や官衛などの建造に採用されて行った。

その初現は、舒明天皇11年（639）に建立された吉備池廃寺（百済大寺跡）である。吉備池廃寺の重弧紋（Fig.36―１）は、軒平瓦用に作られた平瓦（厚3.0～4.5㎝）の木口に三重弧紋を押し引いた後、創建法隆寺の軒平瓦に用いられた型押し忍冬紋が押捺されている。

この２年後（舒明天皇13年〔641〕）、蘇我倉山田石川麻呂が発願し建立されたのが山田寺である。Fig.36―２は、その創建瓦である。粘土板を桶（造瓦具）に巻きつけて出来上がった粘土円筒を木製の刻線叩板で叩きしめ、瓦当紋様を押し引くために粘土円筒の直径の広い方に粘土の帯を貼りつけている（これによって段顎が生まれる）。回転台の回転によって重弧紋が押し引かれている。その製作過程はおよそ前項、Fig.32に示した姫寺例重弧紋の例に近いものと思われる。報告書がＡ形式とした創建期の重弧紋軒平瓦が Fig.36―２である。

Fig.36―３は川原寺跡出土の重弧紋軒平瓦である。寺は斎明天皇明日香川原宮の跡に建立され、天武天皇２年（673）にこの寺で一切経の書写が行われたという記録から、この時以前に完成していたであろうとされている。重弧紋軒平瓦としては最も完成期の瓦である。押し引きされた重弧紋は非常に彫りの深い精緻なものとなっている。この重弧紋軒平瓦の製作工程は、およそ前述の姫寺例や山田寺例と同じものと思う。

山王廃寺出土の三重弧紋（ⅡKB―１）については、前項で若干の分析を行ったが以下のような製作工程を持つ軒瓦といえよう。

１．桶（造瓦具）を用いて粘土円筒を製作する。

２．造瓦具・布筒などをはずし、回転台上に粘土円筒の直径大きい方を上にして粘土円筒を設定する（この時、粘土円筒の強度を考慮すれば若干の期間、乾燥工程が必要であるように思われる）。

３．粘土円筒の木口部を包み込むように重弧紋を押し引くための粘土を張り加える。瓦当用の粘土は通常、粘土円筒の凸面側に厚く、凹面側に薄くなる。この貼り加えた粘土を粘土円筒に密着させ形を整えるため凹凸両面とも回転台によってナデつける。この結果、段顎ではなく直線顎ないしは曲線顎の軒平瓦が出来る。

４．木口部に出来た瓦当面に押し引き具を用い、回転台によって三重弧紋を押し引く。

５．乾燥・四分割して焼成し、製品となる。

山王廃寺の三重弧紋（ⅡKB―１）軒平瓦は、大和地方の初期の重弧紋から、どのような過程を経て変化したの

だろうか。吉備池廃寺の例は、厚い木口面に直接重弧紋が押し引かれ、山田寺・川原寺例は粘土円筒の直径の広い方の木口の凸面端に瓦当押し引き用の粘土帯が貼り加えられている（貼り付け段顎）。これを重弧紋軒平瓦初期の姿と考える。

Tab. 9 は、古代瓦研究会シンポジウム記録『古代瓦研究Ⅱ』―山田寺式軒瓦の成立と展開―から大和国以東の重弧紋の軒平瓦の瓦当施紋部の特徴を一覧としたものである。大和以東の国々に建立された山田寺系軒丸瓦を出土する古代寺院（跡）から出土した重弧紋軒平瓦である。重弧紋軒平瓦を出土する遺跡には７世紀後半に建立された川原寺式系や紀寺式系軒丸瓦、さらには藤原宮式系などの軒丸瓦にともなって見られる場合が多い。

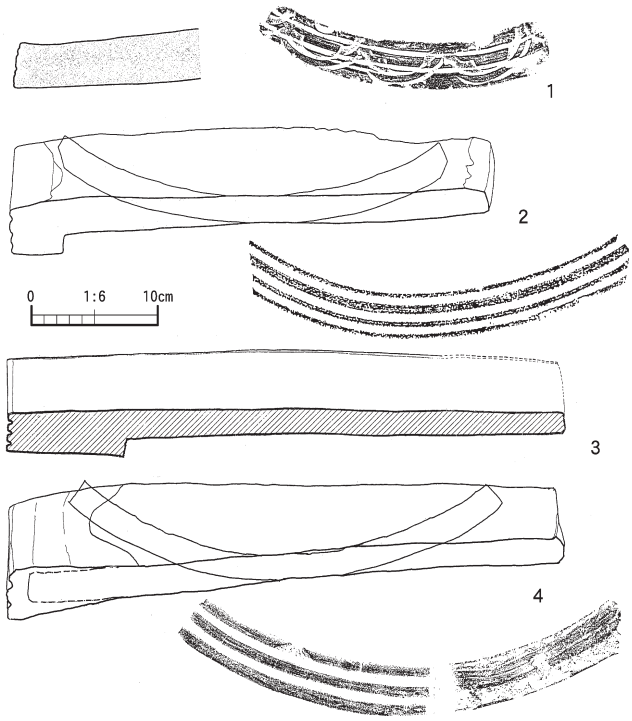

Fig.36　大和古式重弧紋軒平瓦と山王廃寺重弧紋軒平瓦
１．吉備池廃寺　２．山田寺　３．川原寺　４．山王廃寺
（註文献報告書より転載）

Tab. 9 は、大和で創案された重弧紋軒平瓦が時間の経過と大和から東国への物理的距離によって変化していくことが考えられるだろうという前提に立って作成したものである（人や物が移動することで直接、大和地方の造瓦技術などが遠隔地に導入されることはしばしばあるとしても）。Tab. 9 ― 4 の田中廃寺（７世紀中頃）では、重圏紋縁重弁八弁蓮華紋軒丸瓦（IA）が創建瓦とされる。五重弧紋軒平瓦については言及はされていないが軒丸瓦（IA）が山田寺式軒丸瓦に紋様ばかりでなく製作法も近いこと、時期的に平瓦一枚作りの方法はまだとられていない時期と考えられる。重弧紋軒平瓦の断面図をみるかぎり桶巻き作りされ貼り付け段顎の軒平瓦と判断される。

５．尾張元興寺廃寺では、山田寺系軒丸瓦に伴って重弧紋軒平瓦が出土軒平瓦の90％を越えるという。四重弧紋と簾状四重弧紋軒平瓦が創建期のものとされるが以後簾状五重弧紋に変る。桶巻き作りとされ貼り付け段顎の軒平瓦である。

６．大宝院廃寺　山田寺系・川原寺系の軒丸瓦がある。軒平瓦には三重・四重弧紋の二種類がある。実測図からは貼り付け段顎であることは読とれる。多分桶巻き作り軒平瓦であろう。

７．日吉廃寺　山田寺系軒丸瓦にともなって四重弧紋軒平瓦がある。A～Dの四種があり、A・Bは桶巻き作され、貼り付け段顎の瓦。Bは桶巻き作りされ瓦笵押捺、Dは曲線顎で半截竹管状工具による一本引きと解説される。

８．市ヶ原廃寺　白鳳時代の寺院とされ山田寺系軒丸瓦が創建瓦である。三重・四重弧紋軒平瓦がありA～Dの４種に分けられる。Aは桶巻き作り、貼り付け段顎の軒平瓦である。

９．伊豆国分寺　山田寺系軒丸瓦に伴って一枚作り。瓦笵の押捺による曲線顎四重弧紋軒平瓦がある。

10．龍角寺　東国では最も山田寺式軒丸瓦に近い瓦当紋様の軒丸瓦が出土している。桶巻き作りと思われ貼り付け段顎の三重弧紋軒平瓦が創建の時期と思われる。

11．木下別所廃寺　山田寺系軒丸瓦が出土する。桶巻き作り。貼り付け段顎の三重弧紋軒平瓦が伴う。

12．岩熊廃寺　山田寺系軒丸瓦に伴って、三重・四重弧紋軒平瓦がある。三重弧紋は貼り付け段顎、押し引き四重弧紋はヘラ描きとある。

13．龍正院廃寺　山田寺系軒丸瓦に三重弧軒平瓦が伴う。軒平瓦は桶巻き作り、貼り付け段顎の瓦である。

Tab. 9　重弧紋軒平瓦の瓦当面のつくり方について

	遺跡名	重弧紋軒平瓦	製作法など	対応する軒丸瓦	文献および発表者	分類
1	吉備池廃寺(大和)	三重弧紋 三重弧紋施紋後に忍冬紋を型押し	桶巻き作り 創建平瓦より厚く3.0〜4.5cmの厚さがある	重圏文縁重弁単弁八弁蓮華紋	重弧紋の初現 文献１	A
2	山田寺（大和）	四重弧紋	粘土板桶巻作り （A〜D形式）	山田寺式 (重圏文縁重弁単弁八弁蓮華紋)	花谷浩氏 文献２	B１
3	川原寺（大和）	四重弧紋（三重弧紋）	段顎 桶巻作り	面違鋸歯紋縁複弁八弁蓮華紋	文献３	B１
4	田中廃寺（大和）	五重弧紋	段顎	山田寺系	近江俊英氏 文献４	B１
5	尾張元興寺（尾張）	四重弧紋 簾状五重弧紋 五重弧紋	貼り付け段顎、平行線叩き 桶巻き作り	素紋縁素弁蓮華紋 山田寺系 川原寺系	服部哲也氏 文献４	B１
6	大宝院廃寺（遠江）	三重弧紋 四重弧紋	桶巻き作り？ 貼り付け段顎	山田寺系 川原寺系	松井一明氏 文献４	B１
7	日吉廃寺（駿河）	四重弧紋	桶巻き作り 貼り付け段顎 Cは瓦笵、Dは一枚作り	山田寺系	鈴木俊中氏 文献４	B１
8	市ヶ原廃寺（伊豆）	三重弧紋 四重弧紋	押し引き 貼り付け段顎	山田寺系	鈴木俊中氏 文献４	B１
9	伊豆国分寺（伊豆）	四重弧紋	曲線顎 瓦笵押捺	山田寺系	文献４	B１
10	龍角寺（下総）	三重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	山田寺系	山路直充氏 文献４	B１
11	木下別所廃寺(下総)	三重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	山田寺系	文献４	B１
12	岩熊廃寺（上総）	三重弧紋 四重弧紋	貼り付け段顎	山田寺系	文献４	B１
13	龍正院廃寺（下総）	三重弧紋	段顎 桶巻き作り	山田寺系	文献４	B１
14	光善寺（上総）	二重・三重・四重弧紋	貼り付け段顎	山田寺系とされる 重圏紋縁重弁四弁	文献４	B１
15	九十九坊廃寺(上総)	四重弧紋	貼り付け段顎	光善寺軒丸瓦の系統	文献４	B１
16	二日市場廃寺(上総)	三重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	山田寺系 紀寺系	文献４	B１
17	上植木廃寺（上野）	簾状重弧紋 三重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	山田寺系（上植木廃寺式）	高井佳弘氏 出浦崇氏 文献４	B１
18	麓山窯跡（陸奥）	三重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	陸奥の山田寺系 （素紋縁重弁蓮華紋）	高松俊雄氏 文献４	B１
19	名生館官衛伏見廃寺 （陸奥）	四重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	陸奥の山田寺系 （素紋縁重弁蓮華紋）	高橋誠明氏 文献４	B１
20	燕沢遺跡（寺院跡） 大蓮寺窯跡（陸奥）	重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	陸奥の山田寺系 （素紋縁重弁蓮華紋）	長島学一氏 文献４	B１
21	郡山遺跡郡山廃寺 （陸奥）	三重弧紋	貼り付け段顎 桶巻き作り	陸奥の山田寺系 （素紋縁重弁蓮華紋）	佐川正敏氏 文献４	B１
22	山王廃寺（上野）	三重弧紋（ⅡKB―１）	曲線顎（包込式） 桶巻き作り	素紋縁複弁七弁蓮華紋 （Ⅳ式軒丸瓦）		B２

文献１　奈良文化財研究所『大和吉備池廃寺』―百済大寺跡―　吉川弘文館　2003
文献２　奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』2002
文献３　奈良国立文化財研究所『弘福寺』川原寺発掘調査報告　1960
文献４　奈良文化財研究所　古代瓦研究会シンポジウム記録『古代瓦研究Ⅱ』山田寺式軒瓦の成立と展開―大和以東―(備考欄の人名はシンポジウムでの発表者)

分類欄　A　平瓦木口部に直接施紋
　　B　瓦当用粘土を加える
　　B１　平瓦小口部凸面に粘土を加えた場合（瓦当面に貼り加える場合を含む）
　　B２　平瓦部木口面を包み込む様に加えた場合

14．光善寺　重圏紋縁重弁四弁軒丸瓦が山田寺系とされる。二重・三重・四重弧紋軒平瓦がある。いずれも、貼り付け段顎の軒平瓦である。たぶん、桶巻き作りであろう。

15．九十九坊廃寺　重弁四弁の山田寺系の軒丸瓦が見られる。他に紀寺系軒丸瓦がある。三重・四重弧紋軒平瓦があり、いずれも貼り付け段顎である。

16．二日市廃寺　山田寺系・紀寺系軒丸瓦がある。三重弧紋軒平瓦がある。貼り付け段顎で桶巻き作りされている。

17．上植木廃寺　外縁の重弧紋が低い山田系軒丸瓦に簾状三重弧紋軒平瓦が伴うと考えられている。桶巻き作りされ貼り付け段顎の瓦である。他に三重弧紋軒平瓦もある。

18．麓山窯跡　陸奥では素紋縁重弁八弁軒丸瓦を山田寺系軒丸瓦としてとらえている。いずれも間弁が連続し、その外に細い円圏紋、その外に幅の広い素紋縁が伴う。軒平瓦は粘土板桶巻き作り。貼り付け段顎である。

19．名生館官衙伏見廃寺　軒丸瓦は18と同じ系統の軒丸瓦。四重弧紋軒平瓦がともなう。

20．燕沢遺跡・大蓮寺窯跡　軒丸瓦は18・19の系統の山田寺系軒丸瓦、重弧紋軒平瓦が伴うと見られる。桶巻き作り貼り付け段顎の軒平瓦である。写真では、山王廃寺ⅡKB―１に近い包み込み風の印象を受けるが実測図では粘土は平瓦部凹面にはまわっていない。

21．郡山遺跡・郡山廃寺　軒丸瓦は陸奥国の山田寺系軒丸瓦である。桶巻き作り（竹状模骨痕）とされ、貼り付け段顎の三重弧紋軒平瓦がある。

以上、大和以東の国々で白鳳期を中心とした寺院（この場合は山田寺系軒丸瓦を出土する寺院跡）に見られる重弧紋軒平瓦を一覧とした。一覧とは言え伊賀・伊勢・志摩・山城・近江・飛騨・越前・越中・越後・信濃などなどの諸国の寺院跡で出土している重弧紋については一瞥もしていない。従って、時間の経過や物理的な遠近から山王廃寺三重弧紋ⅡKB―１について影響を製作工程での変化などについて言及することは許されない。確実にいえるだろうことは、大和で創案された重弧紋軒平瓦は、７世紀後半の大和以東の諸国でも桶巻き作りされていて瓦当用の粘土帯を貼り付け、段顎を作っている方法が、ずっと採用され続けていることである。

この点で時間の経過によるものは問題があるとしても山王廃寺三重弧紋軒平瓦（ⅡKB―１）は、これらと違った作り方をされている点をなによりの特徴としている。三重弧紋軒平瓦としては退化現象の姿としてとらえられかねない製作方法ながら、Fig.36―４に見るとおり重々しさのある立派な重弧紋軒平瓦である。

なお、山王廃寺出土の重弧紋軒平瓦には、吉備池廃寺例のように木口の一端に重弧紋を押し引くもの、山田寺・川原寺例のように平瓦の凸面端に粘土帯を貼り付けているものなどもある。ⅡKB―１を７世紀末ないし８世紀前半に考えることで、山王廃寺の重弧紋軒平瓦の先後の関係を考える一助となると思う。

以下、A・B・CはTab.７・８の内容説明である。

A　山王廃寺既出土例欄には、発掘調査により出土した文字瓦の記入を考えた。欄内には限られた文字数しか記入できないことから、以下一連の報告に記号を与えることとした。出土頻度については２次～平成11年度までに出土し、事務局でカード化出来た数である。

略号

福島　福島武雄「日枝神社境内の大礎石」『上毛及上毛人』53号　1921（大10）

２次　前橋市教育委員会『山王廃寺跡第２次発掘調査概報』1976（昭51）

３次　前橋市教育委員会『山王廃寺跡第３次発掘調査概報』1977（昭52）

４次　前橋市教育委員会『山王廃寺跡第４次発掘調査概報』1978（昭53）

５次　前橋市教育委員会『山王廃寺跡第５次発掘調査報告書』1979（昭54）

６次　前橋市教育委員会『山王廃寺跡第６次発掘調査報告書』1980（昭55）

7次　　前橋市教育委員会『山王廃寺跡第7次発掘調査報告書』1982（昭57）

9Ｈ　　平成9年度前橋市教育委員会発掘調査出土資料

11Ｈ　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団『―山王廃寺等Ｖ遺跡発掘調査報告書―』2000（平12）

18Ｈ　　前橋市教育委員会『山王廃寺―平成18年度発掘調査報告書―』2007（平19）

19Ｈ　　前橋市教育委員会『山王廃寺―平成19年度発掘調査報告書―』2009（平21）

他　　上記以外で山王廃寺の寺域内で発掘され出土した資料

なお、山王廃寺の第1次発掘調査は、前橋市教育委員会『文化財調査報告書』第五集　1975（昭50）に収録されているが文字瓦資料の出土はない。

Ｂ　関連遺跡出土例欄には、前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した発掘調査、群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した発掘調査をはじめ県下の歴史時代関連遺跡の調査事例の成果を踏まえて関連遺跡とすべきである。この問題の解決は、ある程度の時間さえ使えば実現可能であると思う（平成21年から現在まで実施してない）。現時点ではとりあえず、文字瓦資料のうえで直接に同じ文字･同じ筆と考えて良い資料が出土している上野国分二寺他の発掘調査報告書との照合を行うことに留めた。照合の結果は、略号を記入欄に記入した。

略号

僧寺　　群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』1989（平元）

尼寺　　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団『上野国分尼寺跡　上野国分二寺中間地域』1993（平5）なお、『上野国分尼寺跡発掘調査報告書』1970（昭45）、『同前』1971（昭46）が上野国分尼寺跡の報告書としてあるが、文字瓦資料を図版･挿図等で照合が出来ることから、1993年版を利用した。

明神Ⅷ　前橋市埋蔵文化財発掘調査団『元総社明神遺跡Ⅷ』1990（平2）

Ｃ　『山王廃寺跡第6次発掘調査告書』は、「放光寺」銘文字瓦の発見によって記銘瓦の質的な分類を行った。報告では文字銘瓦を胎土・凸面調整・布目（1㎝方眼中の縦横の糸数）・模骨痕の有無などから丸・平瓦を問わず3分類している。報告では「Ⅰ類は山王廃寺創建期に遡ると考えられ、創建期の瓦には文字の書かれた瓦の量が非常に少なかったと推定される。山王廃寺に文字瓦の入ってきたのは、単弁六葉蓮華文瓦、ないし単弁四葉蓮華文瓦が用いられると同じ頃だと考えられる。Ⅲ類もそれ以降であろう。」と記す。Ⅰ類とされたものは桶巻き作り平瓦と凸面を横ナデ2分割した丸瓦である。Ⅱ類は一枚作り平瓦と2分割する丸瓦で、ともに凸面の叩き具痕はナデ消しされている。Ⅲ類は縄巻叩打痕をそのまま残す一枚作り平瓦と縄巻叩打痕をナデ消しした丸瓦である。概略、Ⅰ類は創建期～8世紀前半頃までの瓦で安中市下秋間窯が主たる生産窯らしい。Ⅱ類は『上野国分寺』報告書がその修造期とする8世紀後半以降になる吉井・藤岡方面で生産された瓦である。Ⅲ類は「放光寺」銘文字瓦の年代のきめ手となった「天長八」の紀年銘から、9世紀第2四半世紀以降と考えている。この瓦は安中市秋間窯産である。なお、Ⅰ～Ⅲ分類以外に19年度報告から笠懸窯で作成されたとされる文字瓦については「笠懸」と分類項目をもうけた。Ⅰ類とⅡ類の間に置かれる可能性は高いがⅡ類と部分的に平行関係である可能性もある。

（註）

1　前橋市教育委員会『山王廃寺―平成18年度調査報告―』2007
　　前橋市教育委員会『山王廃寺―平成19年度調査報告―』2009

2　『平成19年度調査報告』で62頁。註6に稲垣晋也氏・岡本東三氏の見解を記した。

3　木村捷三郎氏による瓦笵の分類である。『平成19年度調査報告』62頁註2に概要を記した。

4　複弁蓮華紋軒丸瓦（Ⅲ・Ⅳ）の違いについては『平成19年度調査報告』42頁を参考されたい。なお、軒丸瓦ⅣＣを想定したが現段階では否定できないまでもⅣＡの瓦笵の傷が進行したものである可能性が出てきた。

5　稲垣晋也氏は『飛鳥・白鳳の古瓦』展図録（1970〔昭45〕）のなかで軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合法を４分類している。接着式はその１つで瓦笵に粘土をつめて出来上がった瓦笵の裏面に別作りした丸瓦を接着する方法で山王廃寺の軒丸瓦ではⅡ・Ⅲ・Ⅳ式がこの方法で丸瓦を接着している。

6　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『黒熊中西遺跡１』1982（昭57）

7　重弧紋軒平瓦の製作工程のおおよそについては『平成19年度調査報告』63頁註14に示したが今回は改めて後項「重弧紋軒平瓦の分類と特徴」で検討する。

8　『平成19年度調査報告』44頁、軒平瓦３として報告。

9　今年度調査報告 Fig.36―４がこれにあたる。

10　『平成19年度調査報告』46～48頁　Fig.28―８・９　Tab. 5

11　前橋市教育委員会『山王廃寺跡第３次調査概報』1977（昭52）27～28頁

12　栃木県教育委員会㈶栃木県文化財事業団『下野国分寺跡Ⅻ』（1996〔平７〕）本文編17頁。報告では平面が台形でカマボコ型の軒平瓦製作台の広端木口部に瓦当面を作る壁をつけている。恐らく今年度調査で報告した５や13は、こんな方法で軒平瓦の形が作られたものだろう。

13　佐原　真「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』58―２　1972（昭47）粘土円筒の状態で広端面を下にして「粘土板の合せ目」を考えた場合、「粘土板の合せ目」は右側の粘土板が外にくる場合（Ｚ形）と内側に入る場合（Ｓ形）との２通りがある。

14　川原嘉久治氏「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要10』1992（平４）　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

15　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域（6）』1992（平４）本文編303頁、図表編81頁、写真図版編第168にＺ区59号住居跡遺物の７・８の２点が、これにあたると思われる。なお、本文編に示された図を Fig.27に転載した。

16　『平成19年度調査報告』44・45頁　Fig.27―１

17　Ａ　関口功一「上野国分僧寺金堂基壇中出土瓦について」『東国史論』第１号　1986（昭61）
　　Ｂ　群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』1998（昭63）220頁・335頁

18　藤島亥次郎「朝鮮瓦の製法について」『総合古瓦研究』第二分冊『夢殿』19冊　1939（昭14）

19　Ａ　栗原和彦「大宰府出土の九・十世紀の平瓦」『瓦衣千年』1999（平11）
　　Ｂ　栗原和彦「大宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館研究論集』25　2000（平12）

20　Ａ　註17―Ｂ
　　Ｂ　高井佳弘「上野国分寺出土の群郷名押印文字瓦について」『古代』1999（平11）

21　型押し「方光」については、相川龍雄・住谷修両氏の論考がある（『平成19年度調査報告』62頁註33・34）。なお、高井佳弘氏から住谷コレクションの中に型押し「方光」が２点あるとの教示を得ている。

22　前橋市文化財研究会『山王廃寺跡第６次発掘調査報告書』1977（昭55）38頁

23　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域２』1987（昭52）。Ｇ区４号井戸からの出土。桶巻き作り平瓦で凸面には、この文字のほかに不整格子叩き痕がある。本文編43頁、図表編141頁595―７、写真図版編第167

24　高井佳弘　註20―Ｂ

25　註17―Ｂ　227頁

26　山崎信二　註７　1993（平５）649頁

27　平成18年、筆者は安中市立学習の森資料館および秋間資料館が所蔵する田島伊作氏関係資料および秋間古窯跡出土資料を調査した。

28　松田　猛「佐野三家と山部郷」『高崎市史研究』11　1999（平11）